宗岡二中だより　２月号

令和６年2月１日

自ら学び考える生徒
学校教育目標：心豊かな優しい生徒
明るく元気な生徒

三尺箸の教え

校長　伊藤大輔

２月３日は節分です。この日は、日本各地で様々な病気や災害を追い払う行事が行われますが、その代表的なものが「豆まき」です。豆は「魔滅（まめつ）」に通じ、鬼に豆をぶつけることにより、邪気を追い払い、1年の無病息災（むびょうそくさい）を願います。節分の由来を調べながら、つぎの話を思い出しました。

ある信心深い若者が、いつか地獄と天国の様子を見てみたいと願っていました。すると枕元に仏様が現れて、天国と地獄に連れて行ってくれました。天国と地獄の様子を見ると、どちらの世界も食事の真っ最中でした。海や山のごちそうが載せられた皿がテーブル一杯に並べられていました。そしてどちらも3尺3寸（約1m）の長い箸をもって食事をしていたそうです。天国も地獄もたいした差がないと思っていると、天国にいる人たちはなぜかふくよかな体型で幸せに満たされた表情をしています。それとは逆に地獄にいる人たちは、がりがりにやせほそりイライラした表情をしています。同じ環境なのに、何でこんなにちがうのかな？と若者は思いました。よくよく観察すると、地獄では人々が長い箸を利用して相手の箸を邪魔し、ごちそうを独り占めして食べようとしています。ごちそうを箸につまみ口に運ぶのですが箸が長いため、いつまでも食べることができないのです。反対に天国では人々はゆっくりと箸でごちそうをつまみ、相手の口へ運んで食べさせているのです。同じ環境であっても箸の使い方で天国にも地獄にもなるのです。この教えは仏教で「三尺箸の教え」と言われています。正しい食事マナーの話ではないことには気付けますでしょうか？

この話の真意は自分だけのことを考えているといつまでたっても幸せになれない、「相手に喜びを与えることで、必ずその喜びは返ってくる」つまり、「他人のために生きることによって、自分も幸せになれる」ことにあります。

ともすると、私たちはつい自分の都合を優先させ、人につらい思いをさせてしまっていることに気がつかないことがあります。逆の見方をすれば、人のことを意識して生活することで、誰もが暮らしやすい生活環境をつくることができます。

日常の一場面を思い浮かべましょう。私達は誰かから何かしてもらったとき、自然に「ありがとう」と言います。これは、その気遣いに対する感謝の言葉です。感謝できる人が幸せなのであり、その感謝を「ありがとう」という言葉で表すと、相手も「喜んでもらえてよかった」とうれしくなります。

三尺箸の教えは仏教を支える精神を伝えるためのたとえ話です。この仏法の精神を**「自利利他（じりりた）」**というそうです。自利とは自分の幸せ、利他とは他人の幸せを表します。つまり、「自分の幸せは、そのまま他人の幸せになり、他人の幸せは、そのまま自分の幸せになる。」ということです。先人にあっては国内外問わず大きな会社を興（おこ）して成功を収めた人物が自利利他の精神を支えにしていたようです。

いま宗岡二中生一人一人が来るべき次の舞台を前に準備を整えているはずです。他人と過去は変えられません。しかし、自分と未来はいま・この瞬間から変えられます。誰かを変えたい、何かを変えたいのであれば、まず自分が変わるしかありません。